

3 になる社会
+ 1 が
1 たね!
敵素

コラボレーション

協働

..... c o l l a b o r a t i o n

P.2 特集1
企業・NPO協働奨励事業から見てきたもの

P.4 特集2
第6回ひょうごボランティア・スクエア21開催
～ボランティア活動の「元気アップ」をめざして～

P.5 知っ得納得♪注目の中間支援活動「三田市の新たな拠点『市民活動推進プラザ』誕生!」

P.6 広がれ!ボランティアネットワーク
「『ブックスタートボランティア』と図書館・保健所のいい関係」

P.7 ボラセンの取り組み紹介します!
「伊丹市社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター」

P.7 やってみよう☆情報発信～コラボネット～「携帯サイトスタート!」

P.8 プラザ通信「平成18年度ひょうごボランティア基金助成制度のご紹介!」他



**企業・NPO協働奨励事業から
見えてきたもの**



企業・NPO協働奨励事業 表彰式の様子

ひょうごボランティアプラザでは、開設当初から行政とNPOの協働とともに、企業とNPOの協働支援を課題としてきました。しかし、後者については実績が乏しいために着手が遅れ、ようやく平成17年度に協働奨励事業として発足したところです。そこで、今号の特集では、企業・NPO協働奨励事業の審査を通じて見えてきたものをまとめてみました。

企業・NPO協働奨励事業から

見えてきたもの

プラザの取り組み



企業とNPOの協働助成に先鞭をつけたのは、名古屋をベースに活動しているNPO法人「パートナーシップ・サポートセンター」で、2002年から全国を対象とする「パートナーシップ大賞」事業を実施し、これまで3回にわたり各回5、6団体を表彰していますが、兵庫県が受賞したことはありません。一昨年、プラザが事務局を務めるひょうごボランティア・スクエア21において、「ひょうごボランティア・市民活動フォーラム」の基調講演に同センター代表理事の岸田真代さんをお招きし、企業とNPOの連携について関係者を交えて議論する機会を設けました。その内容については、本誌14号（2004年3月）をご覧ください。

もともとプラザの助成は、新しい分野に挑戦するNPOへの支援（行政・NPO協働事業助成やチャレンジ事業助成）と、NPOの基盤強化への支援

（立ち上げ支援助成、中間支援組織への助成、パワーアップ助成など）に大別できます。その点、今回の奨励事業は異質で、現在取組んでいる事業を対象に、地域社会の課題解決へのメッセージ性が評価されます。従って、奨励事業の選考には、通常の助成事業選考委員会とは別に、新たに委員会を立ち上げ、委員には学界やマスコミから参加いただきました。

企業の社会的責任とNPO



社会の一員として、企業には果たすべき責任があります。第一に利益をあげ経済の成長と雇用の安定をはかる責任、第二に正義と公正の原則に従う倫理的責任、第三に法令を遵守する法的責任があげられますが、さらに最近では企業市民としての社会的貢献（フィランソロピー）が求められています。

もともと企業とNPOの関係は、公害や欠陥商品に対する告発という色彩が強かったのは事実です。現在でも、発展途上国における多国籍企業の行動

監視や、希少資源の保護などでのNGOの貢献は顕著です。しかし、果敢な捕鯨反対行動で知られるグリーンピースが、大企業に働きかけてノンフロン冷蔵庫の開発普及に大きな役割を果たした例があるように、NPOの潜在的能力に着目して協働事業に取り組む企業が増えてきました。経済界の最近の動向については、経団連「CSR（企業の社会的責任）に関するアンケート調査報告書」（05年10月）が手際よくまとめています。

企業・NPO協働奨励事業の選考基準



協働あるいはパートナーシップとは、本来、対等な関係にある人相互、組織相互の関係を指しますが、企業とNPOでは規模や資金面での開きが大きいので、支援型の協力関係が一般的です。協力の仕組みもさまざまですが、その内容はヒト、モノ、カネ、情報など経営資源別に整理した下表をご覧ください。

表 <企業の協力方法>

資金的支援	●助成・協賛 ●社内募集「給与天引き寄付制度」等 ●マッチング・ギフト、マッチング・ファンド制度 ●スポンサーシップ ●ライセンス契約
モノの支援	●現物供与、寄贈 ●割引 ●施設貸与 ●リユース・プログラム ●ボランティア活動支援制度
人的支援	●奨学金制度 ●ボランティア派遣・紹介 ●ソーシャル・サービス・リープ ●企業ボランティア ●出向
情動的支援	●WEBサイトでの情報提供 ●情報提供 ●代行受発信 ●アダプション
複合的支援	●アダプト・ア・スクール制度 ●大学・図書館への講座の提供 ●ジョイント・マーケティング型のキャンペーン活動、コース・リレーティッド・マーケティング(CRM) ●技術提供

NPOについて

- 1) 活動の継続性と経営の安定性に問題はないか
- 2) 事業内容の公開性と透明性の向上に努めているか
- 3) 地域社会の課題解決やまちの活性化に積極的に取り組んでいるか

企業について

- 1) 社会貢献活動への取り組みについて具体的な方針を定めているか
- 2) NPOとの継続的、安定的な協働を進める意向があるか
- 3) 企業倫理の点で問題となる行動はないか

事業について

- 1) 課題を的確に把握し、適切で効果的な事業を展開しているか
- 2) NPOの自発性・専門性と、企業の資源（人材・資金・技術・生産物など）の結びつきにより、単独では達成が難しい成果を挙げているか
- 3) 協働の取組みを通じて、この事業の趣旨や目的についての社会的な関心が高まり、より広汎な展開への見通しが開かれてきたか

もちろん、支援型が悪いわけではありませぬ。ただし、担当者の考え次第で親方下請け関係に陥る危険性があります。そして、NPOの本来のミッションが忘れられ、スポンサーの意向が優先することになります。これは、行政とNPOの間でもしばしば見られる関係です。

しかし、規模は小さくても特定分野の専門家を擁するNPOや、地域に根を下ろしているNPOは企業と対等の関係を結ぶことが可能です。現に、それぞれの特色を生かした協働事業が各地で始まっています。今回の企業・NPO協働奨励事業は、こうした先駆的事例を広く紹介することが目的です。こうした意図は、今回の選考基準に採

信頼性のギャップ



り入れられています。

協働を促進する上での最大の課題は、信頼性のギャップです。企業相互であれば、契約不履行には制裁が伴います。しかし、営利を目的としないNPOの場合、金銭的ペナルティは規制力が乏しく、目的を共有する団体間の信頼性が基本になります。

信頼性は2種類に分けられます。第1は事業推進の能力に対する信頼性で、これはNPOの実績や運営体制の審査で見当が付きます。第2は、損得を外視しても最善の努力を払うかどうかという事業推進の意図に関わる信頼性で、今回は事務局への訪問、担当者に

対する公開面接などの工夫を採り入れた選考を行いました。

相手先の企業にも不安があります。例えば、社名や事業内容を非公開にしてほしいという要望があります。公表すると、他の団体から協力要請が増えることへの懸念があるからです。偽装、粉飾、談合などビジネス社会のルールを揺るがす事件が続発している時代です。性善説を前提とするNPOとの協働に不安があるのは当然かもしれません。しかし、協働とは、お互いの役割や存在意義を認め合い、互いの有する資源を活かし、共通の目的の下、対等の関係で事業達成するものであり、まずは、互いの信頼関係を築くことが



(特)ピア・しんぐうによる事例発表の様子

企業・NPO協働奨励事業 採択団体一覧

(順不同・敬称略)

No.	団体名	協働している企業名	事業名
1	(特)フードバンク関西	・コストコホールセールジャパン ・イオンマルシェ株式会社 ・株式会社ジャパン・フードサービス ・ネスレジャパンマニュファクチャリング株式会社	余剰食品の有効活用による福祉団体支援
2	(特)ピア・しんぐう	兵庫県手延素麺協同組合 揖保乃糸資料館「そうめんの里」	廃棄物原料と再資源を目指しての高齢者元気アップ支援事業 (「華のじょじょ」他「針仕事人」のリメイク・リフォームのオンリーワングッズの展示・販売)
3	(特)神戸まちづくり研究所	みなと観光バス株式会社	交通不便近郊団地での住民・NPO・行政・事業者協働開発のコミュニティバス運行
4	(特)シンフォニー	日本電気株式会社 CSR推進本部社会貢献室	シニアITサポーター養成事業
5	(特)宝塚NPOセンター	・NTTデータ・クリエイション株式会社 ・株式会社NTTデータ ・株式会社NTTデータ経営研究所	阪神地域安心お助けネットWeb

肝要です。

企業とNPOとの協働はまだ試行錯誤の段階です。今後もこの奨励事業を通じて両者の橋渡しの役割を果たし、さまざまな先駆的事例を発信していきたいと考えています。

第6回ひょうごボランティア・スクエア21開催

「ボランティア活動の「元気アップ」をめざして」

今年も開催しました！



去る平成18年1月15日(日)、フレンテ西宮5階フレンテホールにおいて「第6回ひょうごボランティア・スクエア21」が開催されました。これは、ボランティア活動の「元気アップ」をめざすイベントで、「ボランティア・市民活動元気アップアワード」や「ひょうごボランティア・市民活動フォーラム」などの事業に約1,300名が参加しました。

開催内容



ボランティア・市民活動元気アップアワード

このアワードは広く県民や資金提供者からの協賛金を賞金として、県内のボランティア活動団体を公募し、創造的な企画(元気アップコース)やこれまでの活動実績(こっこつコース)の発表を通じて公開審査を行い、賞金の授与を行うもので、ボランティア活動団体と企業等の資金提供者をつなぎ、共通の夢を実現することを目的としたものです。今回は82件の応募があり、書類審査を通過した15団体の中から審査員と参加者の投票等によって各コースの大賞がそれぞれ1団体ずつ選ばれました。

ひょうごボランティア・市民活動フォーラム

今年「市民相互の連携による『市民事業』の可能性を探る」をテーマに、地域団体、NPO/NGO、商店、企業など様々な市民がそれぞれの持ち味を活かし、連携して展開する市民事業の可能性について話し合いました。



参加者がグループに分かれてともに考える参加型のフォーラムを開催しました。

ふれあいマーケット

県内の小規模作業所が出店し、創意工夫した手づくりのグッズやアクセサリ、ドーナツやクッキーなどを販売しました。会場は終日にぎわい、団体間の情報交換と交流が図られました。

地域活動パネル展

県内の様々な地域活動・ボランティア活動団体や前回のアワード受賞団体が日頃の活動などをパネルで展示し、自ら取り組んでいる活動をアピールしました。

※地域活動パネル展は、1月11日(水)

1月16日(月)にかけてフレンテ西宮4階 ギャラリーフレンテにて実施しました。

スクエアのこれから

このイベントは2001年のボランティア国際年をきっかけに始まり、今年が第6回目の開催となります。ボランティア活動の元気アップを目的として行われてきたこれまでのスクエアが、どのような成果をもたらしてきたのでしょうか？

ひとつは、団体の「伝える力」が向上することで、資金面を始め、様々な支援を超える人、しかも関係者だけでなく一般の人々の前でのプレゼンテーションは発表団体に相当の緊張感を与えます。市民から集まったお金を賞金として、多くの市民の前で発表し、多くの支持を獲得した団体が賞金を得る。そういった経験で向上した「伝える力」は、団体の今後の発展に役立つことでしょう。

そしてもうひとつは、普段は日の当たらない活動をしている団体にスポットライトをあてることです。ボランティア活動も随分マスメディアに取り上げられるようになりましたが、それはまだほんの一部です。そういったものに取り上げられにくい活動を行っていても、素晴らしい企画や活動実績があれば「スクエア」という舞台でスポットライトを浴びるこ

とができます。それは、その団体の活動が広く周知されるとともにその団体のモチベーションのアップにつながると思います。

また、寄付の文化の醸成に関しては、今後ともより多くの市民から理解を得ていく必要があります。アワードの仕組みを通じ、フォーラム、パネル展などとともにボランティア活動の関心や理解を広め、多くの市民にとってボランティア活動がより身近になるように、そして市民自らがボランティア活動を支えるという文化が徐々に浸透するように今後さらなる取組みが必要でしょう。

第6回ボランティア・市民活動元気アップアワード 受賞団体

元気アップコース (企画提案型)	元気アップ大賞 (賞金100万円)	神戸定住外国人支援センター 〈事業名〉外国人の子どもの教育環境整備事業
	元気アップ賞 (賞金20万円)	神戸フリースクール 〈事業名〉表現活動及び体験活動を通じた不登校生の元気アッププロジェクト 特定非営利活動法人 愛ランド 〈事業名〉障害者のための在宅就労支援活動 NGOベトナムinKOBE 〈事業名〉ベトナムコミュニティにおける薬物防止キャンペーン
こっこつコース (活動実績評価型)	こっこつ大賞(賞金20万円)	ボランティアいずみ チームWeB こうべ子どもにこにこ会 神戸スタタリングプロジェクト ミュージカルサークル みつくすじゆうす 三木市朗読ボランティア「むれの会」
	こっこつ賞 (賞金5万円)	IMMC (International Music Member's Club) HIVと人権・情報センター 兵庫支部 城北子ども文庫 神戸大学総合ボランティアセンター 車椅子レクダンス普及会 宝塚支部

NPOのためのNPO、これが中間支援組織です。このコーナーでは、県内の中間支援組織が展開する特色ある活動をご紹介します。

三田市の新たな拠点

～「市民活動推進プラザ」誕生!～

市民活動推進プラザとは

平成17年9月15日、JR三田駅前のビル「キッピーモール」内に、協働のまちづくりと住民相互の交流を促進する拠点として、「三田市まちづくり協働センター」がオープンしました。

同センターには、市民活動推進プラザ、国際交流プラザ、消費生活プラザ、人権・男女共同参画プラザが設置され、これら4つのプラザが連携して団体登録制度を設けています。166の登録団体は、貸会議室やレンタルオフィス、ロッカーやメールボックス（いずれも有料）等の充実した施設を利用することができる仕組みになっています。

その中の「市民活動推進プラザ（以下、「プラザ」という。）」は、これまで三田市市民活動支援課が設置・運営していた「市民活動サポートセンター」が名称を変更したものです。

市民活動サポートセンターは、平成14年11月、公募の市民や学識者等で構成する「市民活動研究委員会」の提言を受けて三田市が策定した「市民活動支援基本方針（平成15年3月）」の中に、市民活動支援の基本施策のひとつとして位置づけられており、平成15年10月に立ち上げられました。当初のねらいは市民活動支援の拠点を公設公営で試行的に立ち上げ、

市民活動の自律化の醸成や市民による市民活動支援のしくみの構築とともに、市民活動を支援する主体を、行政から市民自身に移行することでした。

そしてこのたび、プラザ開設にあたり、その運営を「場とつながりの研究センター（代表・佐藤等史氏、今夏にはNPO法人格取得予定）」に委託して、公設民営の拠点が誕生しました。

現在、スタッフは、社会人スタッフ4名、地元の開西学院大学総合政策学部などの学生スタッフ8名、市からのスタッフ2名で構成されており、10時から20時まで、常時2名が受付で来所者の対応等を行っています。

プラザも成長しながら「意欲する」人のサポートをめざす

プラザでは、市民活動を行っている、またはこれから活動を始めたいと考えている「意欲する」人々のサポートやつながりづくりを目的として事業を展開しています。

①インターネット「キッピーDEネット」や掲示板・機関紙等で情報の収集やイベント等の情報発信、②市民活動の総合相談、③ネットワーク交流支援、④インキュベーション事業、を大きな柱とした事業を展開している他、講座も実施しています。

9月にオープンして約半年、今は、「まが、住民の皆さんに知ってもらい、来てもらう。そういった関係を積み重ねていく中で、市民活動に関するニーズを発掘するこ

とが一番必要です」と、プラザ長の佐藤氏 と言います。プラザが発行した機関紙を通じて、市民活動団体相互のネットワークが芽生えるなど、少しずつ事業の成果が見えてきています。

開設して間もないため、今はまだプラザ自身の基盤を強化していく段階にあります。そのため、プラザが目的としている、様々な団体の活動拠点、ネットワークづくり等に向けて、スタッフが外に出て活動者と顔をつなぐことや、これまでプラザ利用者であった活動者を、今後はプラザの運営者側に巻き込んでいくことが求められており、これからの活動に大きな期待が寄せられます。



利用者でにぎわう情報交流広場

市民活動推進プラザ（プラザ長 佐藤等史）

〒669-1528 三田市駅前町2-1 三田駅前一番館（キッピーモール）6階
TEL 079-559-5168 / FAX 079-559-5169
URL <http://www.kippy-de.net>

赤ちゃんに絵本の楽しさを

ブックスタートサポートボランティア「らっこ」

●4か月児健診でよい絵本との出会い

三木市総合保健福祉センターに次々と訪れる保護者と赤ちゃんたち。今日は4か月児健診の日です。健診を待っている赤ちゃんの前に絵本が広げられ、ボランティアの人たちが何かお話をしています。赤ちゃんに絵本を読んであげているのは「ブックスタートサポートボランティア「らっこ」」の人たちです。ブックスタートを始めるにあたり、三木市ボランティアセンターが開催する5回の研修を受けた、絵本や子ども好きな人たちが「らっこ」のメンバーです。



健診に来た保護者にブックスタートバックを渡しています。

●ブックスタートとは?

赤ちゃんの周りのにいる人たちが肌のぬくもりを感じながら言葉と心を通い合わせることは、かけがえのない貴重な時間です。そのようなひとときを「絵本」を通して、日常の中にたくさん作っていくことを目的として1992年に英国で始まったのが「ブックスタート」です。

三木市でも図書館の事業として、平成15年8月から毎月、4か月児健診に参加した全ての赤ちゃんに保護者に「ブックスタート・バック」と呼ばれるセットを手渡しています。「ブックスタート・バック」の中には、プレゼントとして用意された絵本の中から保護者が赤ちゃんのために選んだ絵本や絵本リスト、地

域の図書館の案内、子育てに関する情報などが入っています。

●ボランティアの人たちの思い

保健福祉センターの待合室のテーブルにはたくさんのお絵本が並べられており、保護者と赤ちゃんに「らっこ」のメンバーが丁寧に対応しています。お母さんやお父さんが赤ちゃんに絵本を読んであげることの大切さと同時に、赤ちゃんに話しかけることや歌ってあげることの大切さなども話の中に折り込み、この日がいよいよ絵本との出会いの日になるようにとの思いで活動を続けています。ブックスタートは「ブックスタート・バック」を渡すことだけが目的ではなく、ブックスタートに込められたこのようなお「メッセージ」を保護者と赤ちゃんに伝えることがもっとも重要なことだと思っています。



丁寧に、絵本を読んであげることの大切さを伝えていきます。

「らっこ」の今後の取り組みとして、「1歳の絵本のひろば」の開催や、地域に向かい絵本の魅力を伝える「絵本の読み聞かせ」の事前などを、自主企画として検討しています。

ブックスタートサポートボランティア「らっこ」

〒673-0402
三木市加佐1015-12
TEL・FAX 0794-83-5123

「ブックスタートボランティア」と図書館・保健所のいい関係

ボランティアとの協働で広がる図書館活動

「三木市立図書館」

「ブックスタートサポートボランティア「らっこ」」との協働について、三木市立図書館からお話を伺いました。

Q どのような経緯で連携・協働が始まったのでしょうか。

A ブックスタート活動は、市健康課、図書館、三木市ボランティアセンター、ボランティアが協働することにより、この運動がより充実した広がりを持ち、継続して発展するものと考え、地域全体で赤ちゃんの成長と保護者の子育て支援をしていくことになったものです。

Q 「ブックスタートボランティア「らっこ」と協働することの意義は?

A 育児に精通している赤ちゃんの健診に従事する保健師さんでも、絵本をどう赤ちゃんや保護者に伝えるかはむずかしいことです。実際に絵本の読み聞かせをし、絵本を読むときのポイントを伝えたり、親子のふれあいの大切さを説明しながら絵本を紹介することが重要です。今までの子育て支援や絵本の読み聞かせの活動の経験から、そのようなノウハウを豊富に持ち、「らっこ」で活動している皆さんなら身近な子育ての先輩として相談に応じることができます。赤ちゃんとその保護者の絵本との出会いを和やかに演出できることに、ボランティアグループと協働する意義があると思います。

Q 今後どのような連携・協働を考えておられますか。

A 乳児健診・1歳6か月児健診だけでなく、図書館・児童センター、公民館などの場で、ボランティアの人たちとの協働により、乳児対象のお話やストーリーテリング等を開催し、本との出会いの場をつくるなど、それぞれの地域でフォロワーアッププログラムを展開する体制をつくりあげていくことをめざしています。

Vol. 12

Add.1

「サワヤカこうべ」を長く続ける「サワヤカ」を応援まげびり
**大日通周辺地区
 まちづくりを考える会** (神戸市中央区)

地域がひとつになって安心安全の、居心地の良いまちづくりを進めているのが「大日通周辺地区まちづくりを考える会」です。

中心となっている「大日六商店会」は、阪神・淡路大震災によって大きな被害を受け、43店舗が20に減り、残った店でも世代交代がありました。店主になった若い世代は、震災での助け合いの経験から、これからは商売だけでなく、地域への貢献やボランティア活動への参加、また他の団体(婦人会・学校・PTA・ボランティアグループ・行政など)との連携が大切と考えるようになり、「考える会」を立ち上げました。



空き店舗跡地の広場では、千名規模の1・17震災メモリアル「鎮魂歌」から金魚すくいまで、年間大小約80回のイベントが催されています。また、地域の老人ホームへの月2回の出張市場は、先日148回目を迎えました。昨年からは地域通貨「元気」も発行しています。在宅の高齢者は、ふれあい給食に参加すると「元気」がもらえ、介護施設や病院、郵便局で使



利用で賑わう出張市場

うことができます。子どもは道路の掃除などのお手伝いをする「元気」がもらえ、学校で貯めて楽器や運動具を購入することができます。このように多彩な活動ができるのも多くの団体や人との連携があるからです。「考える会」は、「ちよつと応援まちづくり」をモットーに、もう少し手を伸ばせばできることを、長く続けていくつもりです。

**大日通周辺地区
 まちづくりを考える会**

〒651-0064
 神戸市中央区大日通6-1-4
 TEL 078-221-6748
 FAX 078-231-1153

(取材地域活動コーディネーター 高村 有子)

Vol. 12

Add.2

震災当時の「サワヤカ」を「命」を守る「サワヤカ」を住民自身の自立
さわやかこうべ (神戸市中央区)

大震災から11年目を迎えた1月17日の未明、神戸市役所隣・東遊園地のろうそくの灯りの中に佇み、「多くの人たちとの協働で今年も「1・17の灯り」を灯すことができた」と、感慨深げに話される「さわやかこうべ」代表の梶明さん。

「さわやかこうべ」の人たちは11年前の震災直後から、避難先の小学校、仮設住宅、復興住宅の被災者に対し、「被災者の自立への取り組み」の支援を柱



グリーンパトロールのみなさん

にした活動を行ってきました。特に平成7年8月には、須磨区北落合の仮設住宅を中心に近隣の七つの仮設住宅で単一の自治会の立ち上げに尽力し、居住者同士が助け合い、自立する力をつけることに力を注ぎました。立ち上げた仮設住宅自治会の最大の課題は「孤独死対策」でした。「孤独死が出たら隣の責任」ということを居住者に徹底し、隣同士で責任をもち、消防署と会長宅への通報体制を設けました。仮設住宅の居住者の「命」を守ることを最優先にし、さらに「居住者自身が自分達でできることは率先して自分達で行う」という自立意識の仕組み作りをした後は、居住者の人たちに任せるという方法をとりました。

現在でもメンバーの人たちは、市内各地で福祉活動やグリーンパトロールなどのボランティア活動に取り組んでいます。仕事を終えたら「さわやかに去って行く」というのが「さわやかこうべ」の名前の由来です。

さわやかこうべ

〒650-0011
 神戸市中央区下山手通7-18-1-214
 TEL・FAX 078-361-5635

(取材地域活動コーディネーター 松本 竹生)

Vol. 12

Add.3

震災から生まれた新たなつながり

長田ボランティアセンター・
それいけネットワーク (神戸市長田区)



作業所のみなさんと配達に行きます

震災を契機に生まれた長田ボランティアセンターは、震災直後の避難所から仮設住宅、そして復興住宅へと支援活動を進めるとともに、新旧のボランティアグループやNPO法人、地縁団体、企業などと連携をとりながら、誰もが安心して暮らせる地域づくりをめざして歩み続けています。

なかでも小学生たちが作業所でのボランティア体験を通して制作した作品を区内の「いちば」で販売する「子どもいちば」は、今ではボランティアセンターの代表的な事業の一つとなっています。これは学校と障害者団体・市場・ボランティアセンターが双方方向のネットワークを構築してきた成果です。この取り組みは、子どもたちが地域の障害者や高齢者への理解を深めるだけでなく、自分たちのアイデアを商品として



作業所クララペーカーリーでパン作り

て生み出す体験も含めた総合学習となっています。

また、昨年夏に発生した作業所の火災時には、現地に対策本部を設置し、400名に及ぶ復旧作業のボランティアのコーディネートボランティアを受け持ちました。現場にはこの10年間に起こった他地域での災害現場で培ったノウハウが生かされ、平時も災害時も10年間をともに歩んだ仲間たちの姿がありました。

長田ボランティアセンター・
それいけネットワーク

〒653-0016
神戸市長田区北町3-4-3 長田区総合庁舎内
TEL:078-574-2408 FAX:078-574-2427
E-mail: nagatavc@aqua.famille.ne.jp

(取材) 地域活動コーディネーター 末廣 順子

Vol. 12

Add.4

神戸で生きる沖縄の心「ゆいまーる」

ゆいまーる神戸 (神戸市須磨区)

大震災直後、仲間や知人らと避難所で炊き出しなどを始めたのが「ゆいまーる神戸」の活動の始まりです。仮設住宅での食事の提供、さらに被災高齢者が復興住宅に移ってからその人たちとのつながりを大事にし、デイサービスや配食サービスを続けてきました。現在、「地域の中で地域の人たちが共に支えあうまちづくりを」との思いが叶い、商店街の空き店舗を利用して生きがい型デイサービスを行っています。バスを乗り継いで復興住宅から通う方が多いのですが、最近では地元の方も参加するようになってきました。八百屋、



小学生の演奏を楽しむ利用者のみなさん

電気店、洋品店、食堂など形の見えるものを提供(販売)する商店街の中で、形の見えにくい福祉のサービスを提供することも地域に定着しつつあります。「ゆいまーる神戸」の活動は、少なからぬ人たちの支援によって支えられています。震災直後からの支援者である長野県のトラック運転手Oさんからは、高齢者の送迎用に車の提供を受けました。この車は、難病のため12歳で亡くなった娘さんの形見ともいえるもので、「ふみかー」の愛称がつけられ、活動の支えになっています。

活動に係わっている皆さんは、地域の人よりどころとなり地域の中で地域の人たちと共存していくことに、確かな手ごたえを感じています。代表の石井明美さんは「沖繩の出身で、ゆいまーる」とは沖繩の言葉で、助け合い、を意味します。「ゆいまーる神戸」は震災以来途絶えることなく、現在もこの言葉とおりの活動を実践中です。

特定非営利活動法人
ゆいまーる神戸

〒654-0141
神戸市須磨区竜が台5-17名谷南センター内
TEL 078-792-5728
FAX 078-792-5815

(取材) 地域活動コーディネーター 松本 竹生

Vol. 12
Add.5

地域の身近な「寄り合い所」をめざして

チャリティショップ“くるりん”（西宮市）

“くるりん”は、阪神・淡路大震災の時、全国から寄せられる救援物資を被災者へ配分する活動からはじまりました。

「震災直後は必要に迫られて積極的にリサイクル品を利用していた人々も、暮らしが落ち着いてくるとまた大量のゴミを出す生活に戻ってしまう。リサイクルへの意識を高めたい」という気持ちからチャリティショップを開きました。家庭の不用品を寄付してもらい、再利用・販売して、売り上げの一部を積み立てる「自然災害基金」を設けて、昨年11月のパキスタン地震などの国内外の被災地支援に役立てています（32力所総額420万円 1996～2005年12月現在）。

寄付品は毎日お店で受付しています。店内の奥のスペースでは文化教室もしています。高齢者が受身でなく、自分の持つ才能や特技を活かして講師を務め、折り紙教室や手芸教室を開催しています。また、高齢者・障害者も安心して学べるパソコン教室がないという声に、少数でできる細かい指導が受けられる教室をはじめました。

震災を原点とした活動は、高齢者や障害者、女性や若者などさまざまな人が参加できる地域社会づくりをめざし、変化



チャリティショップくるりんの店舗前

を続けています。

“くるりん”は、「寄付や買い物をすることで社会参加できる」「ここへきたら誰かとおしゃべりができる」「パソコンを通じてやりがいや楽しみが増える」と、ここを訪れる人の地域の身近な「寄り合い所」でありたいと願っています。

チャリティショップ
“くるりん”

〒663-8203
西宮市深津町3-27
TEL・FAX:0798-67-6641
URL: <http://kururin.org/>

（取材地域活動コーディネーター 高村 有子）

Vol. 12
Add.6

ファイダーの向こうに見えたもの伝え続ける

ボランティアグループ「とまと」（芦屋市）

芦屋市では阪神・淡路大震災直後に「芦屋ボランティア委員会」が組織されて、被災者を支える活動を続けました。そのひとつとして、市民の目で見た震災の記録を残そうと、市民にレンズ付きフィルム約100個を配布したところ約2,500枚の写真が撮られました。そのうち50点がパネルになり全国を巡回しました。

「委員会」は解散しましたが、その志を受け継いだ市内在住のメンバーで結成したのが、ボランティアグループ「とまと」です。その後、芦屋市や各地で写真展を開きましたが、もっとたくさんの人たちに写真を見てもらえるようにと



市民の眼によって綴られた写真集「伝えたいあの日」

という声に、パネルになった以外の写真を整理し、写真集「伝えたいあの日」芦屋市民による芦屋の記録―」ができました。

震災10年目には、震災写真展と「タイガー大越スペシャルコンサート（追悼・感謝・出発）」を企画。お母様が市内で被災し、直後に芦屋に戻られた大越さんは全壊の隣家から人を掘り出す等の経験をしておられ、譜面に「伝えたいあの日」の写真を貼り付けて作曲した作品には、来場者の多くが涙したそうです。

また、歴史的記憶をテーマにしている写真家の米田知子さんが、「とまと」の案内により被災地の風景を撮影した作品は、芦屋市立美術館で「震災からの10年写真展」として開催されました。この三者の「コラボレーション」は高く評価され、現代美術の祭典「横浜トリエンナーレ」にも出品されました。

「とまと」は被災者訪問からはじまった高齢者の方々のふれあいの会を定期的に続けながら、あの日、ファイダーの向こうに見たものを伝え続けていきます。

ボランティアグループ
「とまと」

〒659-0068
芦屋市業平町8-5 芦屋市社協内
TEL:0797-32-7530 FAX:0797-32-7529
URL: <http://www.geocities.jp/ashiyatomato/>

（取材地域活動コーディネーター 高村 有子）

Vol. 12

Add.7

震災から防災へ

武庫が丘高層自主防災会(三田市)

震災後、やっと手に入れた家を開放し、住み慣れた地域を離れ、終の棲家として復興住宅に転居した方たちが大勢います。三田市にある「県営武庫が丘高層住宅」(305戸)もその一つです。入居後すぐにできた自治会やSCS(高齢世帯生活援助員)の配置によって、被災者や高齢者への見守り活動・安否確認を行うとともに、集会所でのふれあい喫茶などを通して顔の見えるつながりを強めてきました。

しかし震災から10年たった現在では、691人の住民の1/3にあたる222人が65歳以上で、70歳以上の高齢者が176人も含まれるという高齢化住宅になりました。平成12年には、自治会傘下組織「武庫が丘高層自主防災会」が結成され、毛布の備蓄や定期的な自動火災報知器、消火器の取り扱い訓練を行っています。震災から11年目を迎えた今年は、住民総出で取り組んだイベント「大震災を風化させない為に」を開催しました。これは、住民相互の親睦と災害に強い地域づくりを推進できるような災害時の炊き出し訓練を兼ねたもので、三田市消防本部の協力によ



あの日を忘れない～炊き出し訓練

る心肺蘇生訓練も実施しました。

今後は地震に備えての家具の配置や固定、火災予防のための暖房器具や火気の取り扱い方など高齢者を中心に指導していく予定です。

これら防災への積極的な取り組みは、大震災で被災した体験が大きく生きているのです。

武庫が丘高層自主防災会

〒669-1544
三田市武庫が丘7丁目6-2-501
TEL・FAX 079-559-4029

(取材地域活動コーディネーター 末廣 順子)

Vol. 12

Add.8

これまででもこれから

一粒の会(洲本市)

洲本市の黒岩恵さんは保育士をリタイア後、老人会を通して、高齢者や障害者の困っている様子や不安な思いを抱えている様子を知り、老人福祉のために何かできないかという思いを強めていきました。その思いに共感した5人の女性たちが集まり、グループ「一粒の会」が結成されました。市民活動という言葉もまだ耳慣れない昭和56年、地域で初めて友愛訪問が開始されることになったのです。その後、友愛訪問に加え給食サービス(会食型)、

メンバーの特技を活かす手作り小物サロン、教えあい活動や施設訪問など、活動の幅がひろがっていきま

また阪神・淡路大震災では、自分たちより被災が甚大であった北淡・津名といった隣接地域への救援活動に「一粒の会」が中心となって、洲本ボランティア協会や地元企業とも協働しながらいち早く取り組みました。この時の団結力や地域のつながりが、高齢化

が進む現在の日常生活の中にも、お互いに支えあい助け合うという形になって息づいています。設立から25年、時代のニーズに对应しながら活動の幅もメンバー(現在93名)も増えてきました。定例の活動に加え、高齢者の心の健康と安全を守るための講座も先んじて取り入れてきました。そのおかげで、介護保険制度の導入に際してもスムーズに対応できたという声も聞かれます。今後は設立時からの目標である「無理をせず、何か一つできることから」に立ち返り、きめ細やかな気配りのできる「地域の家族会」をめざした組織にしたいと考えています。



地域の皆さんとクリスマス会

一粒の会

〒656-0025
洲本市本町2-2-20
TEL・FAX 0799-23-1216

(取材地域活動コーディネーター 末廣 順子)

ボラセン 紹介します



今回は
【伊丹市】

地区ボランティアセンター設置から半年

■地区ボラセンとネット会議

伊丹市では、平成17年度、二つの地区ボランティアセンター（以下、地区ボラセン）が立ち上がりました。一つは「稲小地区助けあいセンター」（7月1日）、もう一つは「神津ボランティアセンター」（8月1日）です。

この二つの地区ボラセンは、地域住民にとって身近な小学校区を単位に「ちょっとした日常の困りごと」を近隣の共助で解決を図ることをねらいとしており、地域住民からそういった相談があれば、同じ地域の登録ボランティアを派遣しています。

このような地域住民が主体となった地区ボラセンの立ち上げと運営は「地域福祉ネットワーク会議（以下、ネット会議）」が中心となって行っています。

このネット会議は、地域における様々な福祉課題について話し合い、地域でお互いが支えあい、助け合える地域づくりを目的としたもので、市内小学校区17地区ごとに設けられている地区社協を中心として市社協職員、在宅介護支援センター、当事者等で構成されています。

■アンケートを通して

ネット会議発足後、稲小、神津の両地区ネット会議では、地区における福祉課題を明らかにするため、地域の高齢者、

障害者等の生活課題の抽出のための調査「お困りアンケート」を行いました。

その調査の結果、「身の回りのことができない」「一人で外出できない」「話し相手がほしい」といった生活上の課題や不安が浮き彫りになり、それらの課題を地域で解決するため、地区ボラセンの立ち上げ・運営へと進んでいきました。

■現状と課題

「お困りアンケート」で浮き彫りになった「ちょっとした日常の困りごと」の量からすると、課題を抱える地域住民の潜在的なニーズはまだまだ掘り起こす余地がありますが、地区ボラセンが立ち上がったからの実際の依頼は、「ミシ出し、話し相手、買い物への付き添い、電球の交換といった生活に密着したものも多く、当初のねらいは的を外していたようです。

また、依頼者からは「昔ながらの向こう三軒両隣のお付き合いがなくなつてくも、たのしくもある」といった声も聞かれる。単なるサービスや物的なもの提供だけでなく心の拠り所ともなっています。

伊丹市社会福祉協議会 ボランティア・市民活動センター

〒664-0014 伊丹市広畑3丁目1番地
いたみいきいきプラザ内
<http://www.itami-ikiki.jp/shakyo/gaiyou/volunteer/volunteer.htm>

やってみよう☆情報発信 コラボネット

第4回 携帯サイトスタート!!



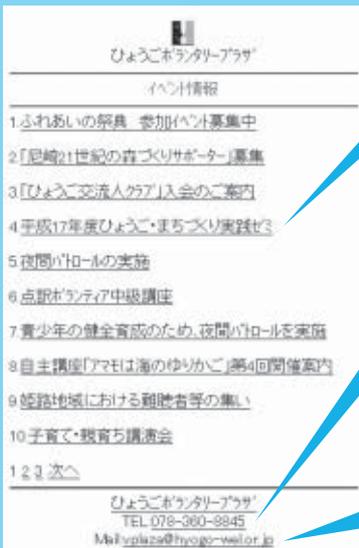
今までパソコンからしか見ることができなかった、ひょうごボランティアプラザのホームページから発信するイベント情報が、携帯電話で見ることができるようになりました！
「今月はどんなイベントがあるかな」
「明日のセミナーの場所はどこだったかな」
このようなちょっとした情報を知りたい時は、お手持ちの携帯電話で気軽にアクセスしてみてください!!

URLはこちら

<http://www.hyogo-vplaza.jp/mobile/>



バーコード読み取りに対応したカメラ付携帯電話をお持ちの方は、左のマークからURLを読み取ることができます。
対応機種・操作方法は、お手持ちの携帯電話の取扱説明書をご覧ください。



クリックするとイベントの詳細が表示されます

電話番号をクリックすると電話をかけることができます

E-mailアドレスをクリックするとメールを送信することができます

ひょうごボランティアプラザでは、子育てや高齢者の支援、緑化活動、交流行事など、暮らしやすい地域をめざして、県民のみなさん同士が助け合ったりするボランティアな活動を、『地域づくり活動情報システム～コラボネット～』で発信しています。

地域づくり活動情報システム(コラボネット)とは...

県内の「地域づくり活動」に関する情報を、インターネットを通じて広く発信し、情報の共有化、さらには団体相互の連携、交流のきっかけづくりを支援することを目的とした情報システムです。コラボネットを利用して情報発信を希望される方は、ID（活動団体番号）とパスワードを発行しますのでプラザまでお問い合わせ下さい。

(TEL) 078-360-8845 (FAX) 078-360-8848 (コラボネット専用E-mail) info@hyogo-vplaza.jp

地域づくり活動情報システム
コラボネット
www.hyogo-vplaza.jp

（ （ （ （ プ ラ ザ 通 信 ） ） ） ）

第6回ボランティア・市民活動
元気アップアワードへ

協賛いただきありがとうございました。

このアワードは活動者の夢の実現をサポートして下さるみなさまのご支援によって支えられています。温かいご支援、本当にありがとうございました。

今回のアワード(特集2:4ページ参照)に協賛いただいた皆様をご紹介させていただきます。(敬称略)

海岸通・エレガノ神戸

株式会社 兵庫福祉保険サービス

財団法人 木口ひょうご地域振興財団

三井住友海上火災保険株式会社

近畿労働金庫

生活協同組合 コープこうべ

大阪ガス株式会社 兵庫リビング営業部

オリバーソース株式会社

株式会社カワサキライフコーポレーション

関西電力株式会社 神戸支店

財団法人 コープともしびボランティア振興財団

特定非営利活動法人 しみん基金・KOBÉ

日本労働組合総連合会兵庫県連合会(連合兵庫)

財団法人 ひょうご環境創造協会

兵庫県労働者福祉協議会

株式会社 兵庫ジャーナル社

特定非営利活動法人
ひょうごセルフヘルプ支援センター

株式会社 遊空間工房

大阪ガス労働組合兵庫ブロック

兵庫リコー株式会社

株式会社 六甲商会

株式会社 KiiNa

大林 弘子

平成18年度 ひょうごボランティア基金助成制度のご紹介!

県民ボランティア活動の活発な展開を支援するため、ひょうごボランティア基金による助成制度を、次に掲げるコンセプトに基づき実施する予定です。

- (1) ボランティア団体の自律性・スキルの向上と裾野の拡大など質・量両面の確保を図る。
- (2) 中間支援組織に対する支援メニューの充実により、ボランティア団体に対する効率的・効果的な支援を行う。

主な助成制度(予定)

名称(仮称)	概要
県民ボランティア活動助成	県民ボランティア活動の促進及び裾野を拡大するとともに、安定的かつ継続的な活動の振興を図り、ボランティアグループ・団体の自立を支援します。(上限3万円 1/2助成)
「市区町村協ボランティアセンター/ボランティア市民活動センター」・NPO協働事業助成	地域課題の解決に向け、市区町村社会福祉協議会ボランティアセンター及び市町が設置するボランティア・市民活動センターとボランティアグループ・NPO法人等が協働して取り組む事業を支援します。(30~90万円)
学生ボランティア活動助成	学生を対象としたボランティア入門教室、体験・交流事業、ボランティアセンター設立準備を支援します。(上限10万円)
立ち上げ支援助成	NPO法人等の立ち上げ時の事務所の借上げ・改装費用を支援します。(上限30万円 1/2又は1/4助成)
チャレンジ事業助成	NPO法人等の斬新で継続的な事業の、新規展開または拡大・発展を支援します。(上限:新規事業100万円、継続事業50万円)
NPOパワーアップ助成	①情報公開、②機関紙発行、③普及啓発、④研修会参加、⑤マネジメント能力向上の5項目達成を支援します。(1項目につき5万円)
行政・NPO協働事業助成(NPO提案型)	NPO法人等が、行政と協働することを目標に、事業を企画提案し事業化に向けて取り組む過程を支援します。(上限:1年次30万円、2年次60万円、3年次100万円)
行政・NPO協働事業助成(行政提案型)	地域課題の解決に向け、行政が提案する新たな取り組みを、NPO法人等が独自のアイデアを加えてモデル的に取り組み、その効果を検証・実証する協働事業を支援します。(上限30万円)
企業・NPO協働奨励事業	企業とNPO法人等の協働により、地域課題の解決に取り組んでいる、効果的な活動に奨励金を交付します。(30~50万円)
インターン助成	NPO法人等の運営基盤強化のため、国内・国外での実践をともなう研修活動を支援します。(上限:国内15万円、国外30万円)
中間支援活動助成	中間支援機能を有するNPO法人等のネットワーク構築、調査研究、講座等の開設、情報提供・相談等の強化を支援します。(上限100万円)

※各助成制度について、詳細が決定期、ひょうごボランティアプラザホームページ等でご案内します。

~安心してボランティア活動をするために~

ボランティア・市民活動災害共済のご案内

日射病・熱中症・細菌性食中毒も、傷害給付のお支払の対象となります!!!

傷害給付

ボランティア活動中の事故によるケガの補償
(通院1日5,000円・入院1日8,000円)

賠償責任給付

ボランティア活動中の事故により第三者の身体
または財物に対する損害を与えた際の補償(4億円限度)

見舞金

傷害給付の対象とならない事由で亡くなられた際に給付(500千円)

年間掛金
1名につき500円

*所定の申込書と掛金を受付した翌日から、翌年3月31日までが加入期間となります。

(4月1日からの加入については3月31日までにお手続き下さい。)

【お問合せ・加入申込み先】

最寄りの市区郡町社会福祉協議会のボランティアセンター

実施・運営主体/兵庫県社会福祉協議会 ひょうごボランティアプラザ
TEL078-360-8845 FAX078-360-8848

取扱代理店/(株)兵庫福祉保険サービス 引受保険会社/三井住友海上火災保険株式会社
TEL078-735-0166 FAX078-735-1890 TEL078-331-8502

2006.01/ ARK61/A

プラザ休館のお知らせ

5月3日(水)~5月7日(日)の間、
プラザは全施設を休館とさせていただきます。

●2006年3月15日発行(年4回発行) ●編集・発行所/社会福祉法人 兵庫県社会福祉協議会 ひょうごボランティアプラザ URL <http://www.hyogo-volazap.jp>
●〒650-0044 神戸市中央区東川崎町1-1-3神戸クリスタルタワー10階 TEL:078-360-8845 FAX:078-360-8848 ●発行人/辻 寛 ●編集人/小森 望見